

2020年7月21日

2020年度第1回
学校関係者評価委員会／教育課程編成委員会 報告書

作成者(書記)：奥村

日 時 2020年7月21日(火) 13:00～15:00

場 所 札幌ベルエポック美容専門学校 401, 402 教室

出席者 <委員>

西村 知子	地域代表	(東北第二町内会 会長)
岩川 祥哉	業界代表	(札幌美容協働組合 副理事長)
山崎 敬正	業界代表	(有限会社 GINGER)
阿部 弘	業界代表	(一般社団法人 日本カラーコーディネーター協会 理事)
大倉 健作	業界代表	(エイベックス・エンタテインメント株式会社 北海道支社 支社長)
佐藤 直雅	業界代表	(株式会社 B-side 代表)
高橋 友紀	保護者代表	(ヘアメイク科在校生 保護者)

<学校側参加者>

藤井 英嘉	札幌ベルエポック美容専門学校	学校長
岩村 勇	学校法人滋慶学園グループ	本部長
山口 敦	札幌ベルエポック美容専門学校	事務局長
藤本 佳奈	札幌ベルエポック美容専門学校	教務部長 兼 美容第二学部 学部長
大澤 慶太	札幌ベルエポック美容専門学校	美容第一学部 学部長
中林 美幸	札幌ベルエポック美容専門学校	ヘアメイク科 学科長
加藤 幸樹	札幌ベルエポック美容専門学校	広報センター センター長
奥村 友英	札幌ベルエポック美容専門学校	学生支援センター センター長

学校関係者
評価委員会

■はじめに

- 1、---学校職員紹介---
- 2、---学校長より---

コロナウィルスの大変な時期の中での開催となったが、職員一丸となり
できることをしっかりやろうという意識をもって学校運営に取り組んでい

る。
授業の形態もオンラインを利用した遠隔の形をとっているが、学生の学習の機会を失わない、学習意欲を削ぐことのないよう試行錯誤し進めている。
オンライン授業には、実際の対面授業では得られないメリットもある。
授業を見学する前は実技の授業については、オンラインでの実施に不安を感じていたが、実際に授業をみると細かい部分までの指導が行き届いているようで、不安を払拭することができた。
今回の会議の中で得た皆様の意見を取り入れて今後の取り組みに生かしていきたい。

3、---山口事務局長より---

委員紹介（学校関係者評価委員 名簿参照）

4、---学校関係者評価委員について---山口事務局長より

専門学校の質の担保を目的に「職業実践専門課程」がスタート。
札幌ベルエポックでは美容師科(平成30年度)、ヘアメイク科・トータルビューティ科(令和2年度)が認定されている。
2つの委員会から成り立ち、企業・業界・卒業生・保護者・地域からの意見を学校運営・カリキュラムに反映させる。
今年度は、コロナウィルスの影響で実施時期が1か月ほど後にずれている。

この制度は下記の3つの柱を軸に認定される。

- ・産学連携
- ・FD(教授力向上)
- ・情報公開

本委員会にて、学内で行った自己点検・自己評価をもとに意見を取りまとめ学校運営に反映させる。

1) 学校運営体制について

組織目的に沿って、2020年度より学科構成・職員体制のイノベーションを図った。

3学科10専攻の学科構成とし、学科の強みを打ち出せるように

- ・2学部2センター制
- ・コース担任廃止
- ・実技授業(学生数30人以下のクラスは1講師体制)

をとる。

今年度新たに発足した「学生支援センター」については、部門を超えたチーム協働・情報発信・人材育成をテーマに掲げ、奨学金や就学支援、合理的配慮、就職などの複合的な学生サポートができることを目的としている。

2) 教育の方針

環境順応型人材の育成から自己変革型人材の育成へ変更している。

自己変革型人材＝自分で考え行動できる人材

札幌ベルエポックでは、卒業後も見据えてキャリア教育のフローをもとに下記の3つのポリシーを軸にカリキュラムを構築している。

・ディプロマポリシー

どのような力を身に付けたものに卒業を認定するか

・カリキュラムポリシー

どのような教育課程を準備し、教育内容・方法を実施しどのように評価するか

(TOP サロンゼミやアシスタントプログラムを通じ、現場経験を重ねる。)

・アドミッションポリシー

どのような入学者をどのように受け入れるか

これらを踏まえ、学科毎のポリシーも合わせて定めている。

3) 学校教育の変化

学習指導要領の改訂、大学入試制度改革

どのように学ぶかが重要であり、主体的・対話的で深い学びで、アクティブラーニングの視点から「どのように学ぶか」も重視し、授業を改善する必要がある。

一方的に説明を聞かせる・板書させる授業から、変化してきている。

(ティーチングからコーチングに変化 「教える」から「聴き出す」、学生とともに学ぶ、ともに授業を創っていくに変化してきている。)

ICT 教育も進み、教材としてタブレット端末の支給を行い、国として取り組んでいる。

入学試験でもアドミッションポリシーに照らし合わせ、卒業後のキャリア支援として同窓会の変革を行っている。

5、---教育活動報告---藤本教務部長より

2019年度数字報告

- ・在校生数：446名
- ・退学・転科者数：36名
- ・退学率：8.1%

退学理由として、きっかけが学費となるケースが増えてきている。

そのきっかけからクラス内の友人関係や進路迷いなど様々な状況へとつながり、退学となった。

教務としても入学前教育や3か年計画で担任研修の実施などを実施し、途中退学の減少に取り組む。

---国家試験---

- ・美容師国家資格

美容師科 95名(92.2%)

ヘアメイク科・ブライダル科 19名(95%)

不合格となった学生は次回試験に向けてフォローを行う。

---就職---

- ・就職希望者数：209名
- ・内定者数：202名（第一専門職内定：192名）

コロナ禍の中での教育の取り組み

「学びを止めない」をテーマに、課題対応授業→WEB遠隔授業→

学科ごとに分散登校→実技授業は登校、筆記授業はWeb遠隔授業で実施。

ZOOM、Youtube、google classroomなどのアプリ・ツールを活用しWEB授業を実施。

就職活動や業界とのTOPサロンゼミもオンラインを活用して実施している。

WEB授業を行うことでのデメリットとして

- ・学生の受信環境(デバイスやwi-fiなど)
- ・理解度の確認とフォロー

→iPad の学生特別価格販売や wi-fi ルーターの貸し出しや一部登校で対応。
また、理解度の確認をするためにも学生への動機づけが重要(課題)と感じている。

保護者代表 高橋様より)

姉妹で同時にオンライン授業を行うと、片方がうまく受信しないなどの不具合もあった。

娘たちが授業に参加しているのを見ている中で、リモートだからよかった点もある。

細かい作業をしているということが全体像で見て理解することもできた。

山口事務局長より)

オンラインでの遠隔授業を実施したことで見えてきた課題やメリットがあるので、今後生かしていきたい。

業界代表 岩川様より)

去年に比べ退学率が高まっているのは残念に感じるが、卒業生は年代によっても大きく違い、今のこの状況がどういった結果につながっていくか。

今の若い人材は「早くスタイリストになりたい」＝「はやく稼ぎたい」という焦りを感じているのではないかと思われる。

美容師の給与は不透明な部分もあるので、具体例を示し教育することで、離職も減らせるのではないかと考える。

美容師の仕事の楽しさ(やりがいや稼げる環境など)をもっと伝える必要がある。

業界代表 阿部様より)

経済を含めた時事問題を、ファッションの学校では実施している。コロナやGoTo キャンペーンなどの時事問題を取り扱い、これまでのやり方ではなく働き方改革(インスタグラムを代表とする SNS の活用など)について考える時間を設けている。

自分なりの中かができるのではないかとということも授業の中で行うことも必要なのではないかと感じる。

Youtube などのいいところはいつでも・どこでも・何度でも見ることができること。これはこれまでの対面授業では実施できなかったことなので、今後活用していくといいと思う。

業界代表 佐藤様より)

コロナ禍において、ヘアメイク業界は、東京と地方の格差が大きく(東京に現場が集中している)就職に影響を与えている。

美容師をやりながらヘアメイクをやるという働き方を知らない学生が多いので、そういった選択肢があることを伝えていくことが必要。

フリーのヘアメイクアシスタントについては、一般企業と違い4月採用と決まっているものではなく、アシスタントに欠員が出ると募集するなどの状況である。

また、ヘアメイクの知識技術だけではなく税金のことや働き方(正社員としての働き方や個人事業主としての働き方など)も授業で学生に伝えていくことも必要だと感じている。

地域代表 西村様より)

小学校の委員もやっているが、ベルエポックはスピード感をもって取り組んでいる印象がある。

業界代表 大倉様より)

美容業界・エンターテイメント業界は若い世代から見ると華やかな世界に見える。しかし、実際には泥臭い部分も多く、しっかり気持ちをもって入らないと乗り越えられない部分もある。

技術も大切だが、精神的な部分の教育(厳しい部分も見せる)を行っていくことができるといいと思う。

それぞれの業界とのコラボレーションで相乗効果を期待したい。

6、---岩村本部長より---

ベルエポックとしては委員の皆様からの意見をもとに、スピード感をもとに取り組んでいく。

新たなチャレンジを続けて成長し、業界・地域・卒業生にできることはなにかを考えて行動していきたい。